翔べ！世界へ

「会い、話し、聞く」ことの楽しさと難しさ

――私の研究活動の原点――

といえばついていき、宴会があればついていってお酒を飲むというような、世話する方としては手のかかる面倒な「子供」であったと思う。

当時は無闇やたらにいろんなことを聞き回って、論文のテーマに直接関係のないことにも興味を持ったり、いろいろ回り道しながら調査を行なっていた。今から考えてみると随分贅沢な時間の過ごし方をしていたわけだが、これらの一見無駄に見える経験は、後々の研究活動にとって大変役立っている。

女性たちの井戸端会議にもよく顔を出した

上座仏教社会における、宗教実践の研究を継続

現在私は日本学術振興会の特別研究員として、タイを中心とした上座仏教社会における宗教実践の人類学的研究を続けているが、今は留学中に調査した南部の農村ではなく、北部のミャンマーと国境を接する地域で調査を行なっている。東南アジア大陸部のタイ、ミャンマー、ラオス、そして中国南部が国境を接しているところには、いくつかのタイ系民族が居住しており、そのうちの一つであるシャンという民族の研究をしている。シャンも同じく上座仏教徒なので、北部の調査で得られたシャンの事例は、留学中に調査した南部の事例と比較対照されることで、その特徴がより明確になる。

このように留学期間の前半はバンコクの大学で学生たちと一緒に、後半は南部の農村で村人たちと一緒に過ごしたわけだが、相手を理解するために、直接会って一緒に暮らし、相手の話を聞き、またこちらから質問するという人類学的調査の楽しさと難しさを一番最初に学んだのはこの時期だった。そして、この時学んだ「楽しさ」と「難しさ」が忘れられなくて、現在も研究活動を続けているといえる。

経団連が事務局を務めている各種奨学金運営団体の活動により、毎年高校生から大学院生までの多様な奨学生が留学し、今日、その経験を活かして内外のさまざまな分野で活躍している。本コーナーは、留学先での経験と現在の活動の模様を紹介することにより、これら奨学生を送り出してきた奨学金運営団体への一層の理解促進と、支え、協力してくれた企業への活動報告とするものである。

国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長　故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界二八カ国の大学・大学院へ一四一名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三五カ国三八八名の外国人留学生への奨学金の供与や文化教育面での事業運営を実施してきている。

お問い合わせ・連絡先：
経団連社会本部　人材育成グループ

奨学生体験者からの寄稿㉘

村上忠良

むらかみ　ただよし

日本学術振興会特別研究員

国際文化教育交流財団第14回生（1989年度）
88年、大阪外国語大学タイ・ベトナム語学科卒業。89年６月～91年５月、タイ国立チュラロンコーン大学政治科学研究科（社会学・人類学専攻）留学。92年、筑波大学大学院修士課程地域研究研究科修了。98年、同博士課程歴史・人類学研究科修了。99年より現職。

タイの社会・文化を研究するため、チュラロンコーン大学大学院へ

私は、タイのチュラロンコーン大学大学院（社会学・人類学専攻）へ一九八九～九一年の二年間研究生として留学した。留学中に経験したことの思い出となると、大学院の授業内容というよりも、授業以外で経験したことの方が鮮明に記憶に残っている。

留学の一年目は、これからタイの研究を進めていくために不可欠な語学の習得のため、またタイ社会、タイ文化の基礎を理解するために大学院の講義を聴講した。日本でタイ語の基礎を学んでいったとはいえ、講義に出始めた当初は先生の話すタイ語があまりにも聞き取れず、一時間半の授業時間中茫然と座っていたことを思い出す。半年を過ぎる頃から理解度が上がり、一年程でようやく授業内容を理解できるようになった。ただ残念ながら、授業内容が分かるようになって程なく、南部の方へ調査に出てしまったので、授業の思い出は少ない。

寮の学生たちとの語らいや旅行で生の声を聞く

留学期間中は大学の敷地内にある学生寮に住んでいた。当時タイへ留学する外国人学生が少なく、さらに学生寮に入るような外国人学生はほとんどいなかったので、寮の学生たちは物珍しさも手伝って、よく話し相手、遊び相手になってくれた。同世代のタイの学生たちと一緒に生活し、その中で彼らの考えていること、感じていることを直接知ることができたことは、書物や大学院の授業からでは得られない貴重な経験だった。

大学の授業に出席するかたわらで、留学二年目に計画していた長期調査の下見と称して、週末や学期間の休暇を利用してタイ南部へよく旅行に出かけた。大まかな目的地だけ決めて、あとは気の向くまま、旅先で出会った人のすすめるまま、南部の各地を見て回った。また、学生寮の学生は地方出身者がほとんどなので、彼らが帰省するときに一緒に連れていってもらい、彼らの「田舎」での生活もかいま見ることができた。このように留学一年目は、首都バンコクでの大学の授業と地方への旅で過ぎていった。

タイ南部の農村でホームステイ

二年目は修士論文のデータを集めるため、バンコクを離れ、タイ南部のタイ系仏教徒の農村で、彼らの宗教実践を研究するための調査を行なった。村長の弟さんの家に泊めてもらい、十カ月ほどその村に滞在した。見ず知らずの日本人の学生を快く迎え入れてくださったご家族には本当に感謝している。村にいる間、私はつたない言葉で子供のようにいろいろなことを質問し、また農作業をするといえばついていき、お祭りがあるといえばついていき、お葬式がある